

11月27日 ガリ版刷り

私が教員になりたての頃、今から30数年前までは、プリントといえば「ガリ版刷り」だった。薄く「ロウ」の引かれたボールペン原紙に鉄筆やボールペンで文字を書き、木枠に挟んで、ドロドロのインクの付いた刷毛でさっと撫でると、文字が更紙に滲んで印刷ができるという仕組みだ。一枚一枚印刷するので、すごく手間がかかった。だからであろうか、プリントの作成は、大切な文書を配布するときに限られていた。

その後、手回しの輪転機が入って画期的にプリント作業が変化した。程なく機械式に変わり、ボールペン原紙さえも不要になった。「革新」とはまさにこのことだと思う。しかし、革新の「有難み」の裏で捨てられた、かつて日本人が持っていた「有難み」に思いを馳せなければならぬ。

昔、ガリ版でクラス通信を刷りながら、生徒一人ひとりの顔を思い浮かべていた。受け取る生徒もすぐにゴミ箱に放り込むものなんて一人もいなかった。

世の中が便利になるにつれ、人の心が殺伐としてきたように思う。便利に走ると、不便に戻れなくなる。しかし、不便の中には人に対する思いやりのようなものが宿っている。いやでも自分ごとである不便が、他者の不便と重なり合うからであろうか。

